
「ねこバナ。」

三毛猫ゲツタウエイ



猫花文庫

「...おい、そっちへ行ったぞ」

「...くそう、手間かけさせやがって」

「...なにぼさっと突っ立ってんだ！ さっさと追え」

「...ちっ」

「はあ、はあ、はあ」

メッセージバッグを前抱きにして、あたしは狭い路地の陰に隠れて奴らをやり過ごした。

「はあ、はあ、はあ」

そうっとバッグを開けてみる。ファスナーの音が出ないように、慎重に。指が震えた。

「ぴきゅ」

バッグの中には、小さな三毛猫が。

ようやく目が開いたくらいの、ほんとにちいさな三毛猫がいた。

* * * * *

「今回のターゲットは、R大学医学部の実験室にいる猫だ」

「猫ですって？」

あたしは呆れた。そんなものを盗み出して何の得があるのだろうか。

「この猫はな、雄の三毛猫だ。遺伝子解析をするために連れて来られたらしい。雄の三毛が産まれる確率は非常に低いからな」

「へえ」

「それでだ。さる猫好きの顧客が、どんな手を使ってでも雄の三毛猫が欲しいと言う。我々が確実に雄の三毛を手に入れられるとすれば、此処しかない」

「一般の家庭では駄目なのですか」

「事は出来るだけ慎重に運びたい。どうやらR大学では、この猫を非合法的なルートで手に入れたらしいのだ。だから表沙汰になっても大して問題にはならないだろう」

なるほど。

影の運び屋、シャドウ・メッセージとして随分色んなものを運んだあたしだが、生きた猫なんてのは初めてだ。

「恐らく追っ手くらいはかかるだろう。どんな追跡からも逃げおおせるお前の手腕、いや足に期待しているよ」

「任せてよ」

あたしは自信満々にそう言った。そう、大して難しい仕事とは思われなかったのだ。

* * * * *

「あんた、随分人気者なんだねえ」

あたしはバッグの中でじっとあたしを見る猫にそう言った。

「ぴきい」

と、猫は何か訴えるように鳴く。

「そうか、おなかがすいたんだね」

あたしは小さな哺乳瓶を取り出した。この仕事は、猫が生きていなければ話にならない。産まれてまだ一ヶ月も経たない猫を運ぶのだから、栄養補給や下の世話だって仕事のうち、なのだそう。

手で抱えて哺乳瓶を口に当ててやると、猫はちゅっ、ちゅっとミルクを飲み出した。

恍惚の表情というのは、こういうのを言うのだろうか。両手で瓶を押さえて、目を細めて、この上なく幸せそうな顔をして。

「おいしいかい」

思わずあたしは、口に出して言っていた。

あたしみたいな女にも、母性ってのがあんだうか。

裏社会で姑息に、誰も信頼せず生きてきたあたしにも。

「けふう」

猫は軽くむせこんで、少しミルクを吐いてしまった。あたしは慌てて口を拭いてやり、背中を軽く叩いた。すると猫はもぞもぞと、くるまっていたタオルに顔を埋めて、もぞもぞと両手を動かしている。

どうやらミルクの時間は終わりだ。

「さて、と」

あたしは立ち上がった。そうして、路地の出口から通りを注意深く見回した。

「ちっ、まだいやがる」

通りには、凡そ五十メートルおきに、奴らの手下が張り込んでいる。あたしがこの辺りに逃げ込

んだのはバレているから、飛び出して来たところをふん捉まえる積もりなのだろう。それにしても、何でこんなに、必死に追って来るのだろう。奴ら、大学の職員とは思えない。絶対裏社会に通ずる人間どもだ。
あんな連中を雇うほど、この猫が大事なのか。

「こんなにモテるなんて、あんたがうらやましいよ」

あたしはバッグの中の猫に言った。しかし猫は、もう眠ってしまったらしい。ひくひくと腹が動いている。

「ちょっと走るよ。シートベルトくらいしときな」

バッグのファスナーを閉め、帽子を目深に被って、あたしは時計を見た。あと二時間のうちに、あたしはこの猫をボスに届けなければ。
するり、するりと路地を出て、人混みに溶け込む。奴らの目線から死角になるように、身体を人の陰に隠す。伊達にこの商売でのし上がった訳ではない。並の人間なら、あたしの存在などに気付かないはずだ。
だが。

「ぬ？」

気配がする。
背後に二人、左右にも一人ずつ。
気付かれたのか。なんてこった。奴らも相当の腕とみた。
あたしは気付かぬ振りをして、そのままの調子で歩き続けた。正面にスクランブル交差点が見えてきた。奴らが仕掛けて来るなら、あそこに違いない。
少々荒っぽいが、やるしかないか。バッグを身体にきつく留め、あたしは覚悟を決めた。

右から左へと流れる車の群れは、渋滞のせいでほとんど動かない。
しかしその向こう、左から右に流れる車は猛スピードだ。
片側三車線ずつ。ひとつタイミングを間違えば、死ぬ。
あたしは人混みをかき分け、車道に面して立った。
後ろから奴らの気配が近づく。
まだだ。まだだ。焦るな。
好機は必ずやって来る。

来た。

あたしは向こう側の流れている車線に向かって、手に持っていたものを放り投げた。
黒い珈琲豆くらいの、その粒々は。
向こう側のアスファルトに散らばって。

ぱん、ぱぱん、ぱぱぱぱぱぱぱん

軽い音をたてて弾けた。
いわゆる癩癩玉というやつだ。

「うわなんだ」

人混みからどよめきが始まる。

きききいいいいいい

車が急停車する。
そして。
大きな路線バスも。

今だ。

「それっ」

あたしは駆け出した。
踏み出した途端、あたしはトップスピードだ。
渋滞中の車の間を全速力ですり抜ける。

「くそお」

背後で奴らが追ってくるのが判る。
向こう側の車線では、うまい具合にバスが斜めになって止まっている。
あたしは全速力のまま、バスの車体の下に滑り込んだ。
摩擦で背中が焦げる。
車体の向こう側まで滑りきったら、あとは走るだけだ。
あたしはまた人混みに突進し、地下鉄の駅へと向かった。
しばらくは時間が稼げるだろう。

と思ったが。

甘かった。
奴ら、地下鉄の駅の入りにまで、見張りをつけてやがる。
しょうがない。ここは強行突破だ。
あたしは全速力で、地下へと続く通路に飛び込んだ。

「いたぞ」

「待ちやがれっ」

奴らはおおっぴらに、しかも大胆に追ってくる。
何なんだ一体。何故奴らはこんなに必死なんだ。
しかし考えている暇はない。

「捉まえろ！」

背後から声がかかる。すると改札口のまん前に、チンピラ風情の男が三人現れた。
構うもんか。
あたしの鉄則は。

スピードを落とさないこと。

「なっ」

全速力のまま、あたしは跳んだ。

「ぐはっ」

あたしは跳び蹴りで、真ん中の男を吹き飛ばした。そしてそのまま改札を飛び越え、電車へと走る。

「逃がすか！」

奴らが追ってくる。丁度列車が滑り込んで来る。
夕方のラッシュだ。物凄い数の人が車両に向かって吸い込まれてゆく。
あたしは走りながら、タイミングを計った。

びiiiiiiiiii

ぶしゅー——

ドアが閉まりきる直前。
あたしはスーツ姿の男を思いきり押し込み、

「ぐえええ」

見事に車内に滑り込んだ。
そうしてすぐに屈んで身を隠す。
押されて妙な声を挙げた男性が、何か訴えるようにあたしを見た。
あたしは。

「ごめんなさい」

屈んだまま、片目をつむって見せた。

* * * * *

ぷるるるる、ぷるるるる、ぷるるるる

ぷち。

「ああ」

「ボス」

「どうした、ターゲットは」

「もちろん確保してますよ」

「なら連絡はするな。さっさと此処まで持って来い」

「ボス」

「何だ」

「奴ら、何故こんなに必死なんですか」

「ん？」

「ただの実験動物にしちゃ、追っ手が激しすぎますよ」

「お前じゃ大したことはないだろうさ」

「冗談でしょ。あんな大規模な追跡は初めてよ」

「む」

「それに、奴らの何人かは、どうやら銃を持ってる」

「...」

「そんなにヤバいブツなんですか、これは」

「...」

「ボス」

「お前は黙って仕事をすりゃいいんだ」

「割に合わないわ。報酬を倍額にすること、奴ら在必死になってる理由を教えること。これが仕事継続の条件ね」

「なにい」

「どうなの。ブツはあたしが握ってんのよ」

「...ちっ、仕方あるまい。いいだろう。報酬は倍だ。しかし仕事の詳しい内容については教えられない。この商売、守秘義務は大切なんだ。判ったか」

「...いいわ。ただし」

「何だ」

「追っ手をまくのに時間がかかる。到着はあと二時間遅れるから、そのつもりで」

「む...判った」

「じゃあ」

「しくじるなよ」

「ええ」

ぶつん。

* * * * *

「ふう。あんた、いったい何者？」

あたしはバッグを開けて、小さな猫に向かって言った。

「びゃう」

猫は何かを訴えている。

「ああ、オシッコ？ それともウンチ？」

あたしは何となくそう思った。ティッシュで股のあたりを刺激してやると、猫はだらりと弛緩した。

あったかいものがあたしの手伝わってくる。

おかしいものだ。子供の世話だってしたことないのに。

ましてや動物の世話なんて。

あたしは。

ふるふると猫が震えた。どうやら用を足せたようだ。

「短い間だけどさ。あんたに名前を付けようか」

そう言って、あたしは猫を抱き上げた。

「珍しい三毛猫、か...」

ふと頭に浮かんだのは。

「トリニティ。そう、あんたの名前よ」

「びゃう」

「気に入った？ そう。ふふふ」

あたしは猫に、トリニティに頼ずりした。

こんな感覚が、あたしに芽生えて来るなんて。

人の温かみすら知らないあたしに。

不思議なもんだ。

「さて、と」

あたしは、隠れている倉庫の隅で、考えを巡らせた。
このまま仕事を続けるわけにはいかない。
奴らは何者なのか。
何故こんな小さな猫を、必死に追っているのか。

さああああああああああああ

雨が降ってきた。
冷たく湿った倉庫の片隅で。
トリニティの体温だけが、あたしをじんわりと温めた。

* * * * *

さああああああああああああああああああ

ぷるるるるる、ぷるるるるる、ぷるるるるる

がちゃ。

「...はい」

「ザイ、あたしよ」

「ああ、なんだタマキか。公衆電話からか？ 一体どうしたんだ」

「調べて欲しいことがあるんだけど」

「何だ」

「ええと、R大学生物学科の、猫の研究についてよ」

「猫？」

「そう。三毛猫を使った研究とか」

「なんだそれ。そんなもん調べてどうすんだよ」

「ちょっとヤバいことに足突っ込んでやってさ。裏を取りたいの」

「猫がそんなにヤバいのか」

「だから、猫じたいの問題じゃないと思うのよ。裏の情報屋なら何か仕入れられるでしょ」

「へえ...なるほどねえ。判ったよ。調べが済いたら連絡する」

「なるべく急いでよ」

「へへへ、一晩付き合ってくれるんなら超特急で調べるぜ」

「ふん、生きて戻れたら考えてもいいわ」

「おい...。そんなにヤバいのか」

「とにかく、急いでね。返信はB端末に流して。セキュリティコードはFで」

「あ、ああ」

「じゃ」

がしゃん。

* * * * *

さああああああああああああああああああ

「ふうふう」

段々激しくなる雨の中、あたしは急いで、隠れている倉庫の隅に戻った。
ザイが返信をくれるまで、下手に動かないほうが良さそうだ。

「ただいま」

「園長先生が、亡くなりました」
「お止めなさい、穢らわしい」
「西の小部屋が、か、火事です」
「ごおおおおおおおおお」
「あなたはああああ」
「ごおおおおおおおおお」
「なにをみたのおおおおおお」
「どおおおおおおおおお」

「レオ」

「にゃーおん」

「レオ」

「ぴきゃっ」

* * * * *

「え？」

はっと我に返った。

さああああああああああああああああああああああああああ

夢か。

「はああ」

あたしは大きく息をついた。
孤児院にいた時の悪夢が、時々こうやってあたしを苛む。
しかし最後はきまって、猫が出てくるのだ。
額に白い十字架を掲げた、あの猫、レオが。
ぬいぐるみが生まれ変わって、目の前に現れたと信じて疑わなかった、レオが。
レオはどうしているだろう。
まだ、孤児院のシスターのところで、元気にしているのだろうか。

「ぴきやう」

もぞもぞと腹のあたりで、トリニティが動いた。
そうして、あたしの胸をよじ登って。

ずぼっ

胸元から、無理矢理首を突き出す。

「ぴきゃー」

「あんた、元気ねえ」

あたしは笑った。

さっきまで死んでしまうかと思っていたのに。

子供ってのは、逞しいもんだ。

そうなんだ。

「さ、ミルクにしようか」

あたしはミルクのパックを開け、哺乳瓶に詰め直した。

少し冷たいような気がしたので、哺乳瓶ごと腹に乗せて温めた。

トリニティは、胸元から首を出したまま、あたしの顔をじっと見ている。

まるで、この世に頼れるものはお前だけだと、言っているように。

「ほら、お飲み」

あたしはファスナーを少し下ろして、トリニティを胸元に入れたまま、哺乳瓶を差し出してみた。

ちゅう、ちゅう、と必死に、トリニティはミルクを貪る。

生きようと必死なんだろう。

こんな小さな身体で。

あたしはそうっと、トリニティの頭を撫でた。

ふと頭の中に、イエスさまを抱く聖母マリアさまの顔が浮かんだ。

「父と子と、聖霊の御名によりて」

あたしは、いつのまにか、祈りを呟いていた。

「我等が人を赦す如く」

すっかり忘れたと思っていたのに。

「我等の罪を赦し給え」

「ぴゃ」

トリニティの食事は終わったようだ。
しかし。

「我等を試みに引き給わざれ」

あたしの祈りの言葉は、止まらなかった。

「我等を悪より、救い給え」

「びゃう」

「アーメン」

あたしの両手は、トリニティを包み込んで、胸の上でしっかりと組まれた。
暗い倉庫の片隅で。
ひとり一匹の微かな温もりを感じながら、あたしは祈った。

ぶいー、ぶいー、ぶいー

携帯端末の振動音で、あたしは我に返った。
トリニティは驚いて頭を引っ込めてしまった。
急いで端末を取り出し、セキュリティコードを入力する。

「はい」

「おうタマキ、俺だ」

「早かったわね、ザイ」

「へへへ。借りは後で返して貰うさ。必ずな」

「そうできるように祈っててよ。それで」

「ああ。R大学の運営母体がさる新興宗教だっただけは知ってるよな」

「ええ」

「その教団幹部のコンピュータをハックした奴とコンタクトがとれた。話がかなり複雑なんで、
要点だけかいつまんで言うぞ」

「判った」

「三毛猫の雄ってのは、いわゆる遺伝子異常の産物だ。人間の手で操作するのは不可能に近かった。だがR大学の研究チームは、体細胞クローンによって、三毛猫の雄を生み出すことに成功したんだ。最近、一匹生まれたんだそうだが」

「えっ、じゃあ」

トリニティは、クローン猫だっていうのか。

「たかがクローンの猫ってんなら、別にどうってこたあねえんだが」

「ただのクローンじゃないの」

「遺伝子異常を抱えた生物の体細胞から、自由に性別を取捨選択出来るってことに、この技術の凄いところがあるのさ。その結果生み出されたクローンは、遺伝子操作が非常にし易い個体になっているそうだ。結局莫大な金をかけても、一匹しか生まれなかつたらしいがな」

「それがどうしたのよ」

「だからさ」

ザイはもったいぶって、おほん、と咳払いをした。

「あの宗教団体の理想ってのは、ユートピアだ。戦争も競争もない夢のような世界さ。ただ、夢のような世界になるためには、人間が同じ考え、同じ意識、同じ性格を持つことが必須だと考えている。そこで奴ら、クローンを利用することを思い付いた」

「え」

「まあ要は、教祖のクローンを数限りなく作ろうってのさ。それも性別を均等に振り分けて、整然とした世界を作るんだと」

「なっ」

あたしは同じ顔の人間が、ずらずらと列を成しているさまを想像して、気分が悪くなった。

「滑稽ね。そんなことが」

「実現するかどうかは判らないがね。しかし奴らは大真面目さ。資金は潤沢だし政界にも顔が利く。ロシアやイスラエルの軍需産業とも繋がりがあるしな。それに、中央アジアの紛争地域にある小国の中枢を、どうやら奴らは押さえたらしい。近くロシアとの間に停戦協定が結ばれるが、それも奴らの裏取引によるところが大きいそうだ」

「まさか」

「そうさ。その小さな国を、奴ら、ユートピアに仕立てようって魂胆なんじゃねえの」

背筋が寒くなった。

なんだってそんなことを求めるのだろう。

あたしには馬鹿げた話にしか聞こえないのだが。しかし。

「そ、それじゃあ、その、クローン猫は」

「ああ。お前が盗み出したんだろ？ 奴ら必死だな。そりゃそうか。宗教団体の命運が掛かってるんだから」

「どうなるのこの子は」

「そりゃあお前...。体細胞やら生殖細胞やらをひっぺがされて、培養にかけられる、ってところじゃねえか。何よりも貴重な実験素材なんだから、殺しはしねえだろうが」

激しい嫌悪感が身体を突き抜けた。

「冗談じゃない」

「あのなあ、忠告しとくが、それはヤバいブツだぞ。さっさとボスに渡しちまえよ」

「何ですって」

「ボスはその猫を、どんな理由を付けて盗んで来いと言ったか知らんが、それ以上関わり合いにならん方がいい」

「えっ、猫の愛好家の依頼じゃないの」

「そんな奴がこんな日く付きのもんに出すかよ」

言われてみればその通りだ。

じゃあボスは、いったい何のために。

考えれば考えるほど、頭が痛くなる。

「いいか、深く関わるな。分を弁えろ。俺達末端の人間がどうこう出来ることじゃねえ」

何なんだ。

こんな小さな生き物を、よってたかって。

あたしの頭は、ぐらぐらと揺れた。

「ぴきや」

トリニティが顔を出した。

あたしをじっと見ている。

見えているかどうかとも判らないような、小さい目で。

「おい、聞いているのか」

ザイの苛立った声に、あたしはひとつ深呼吸して、応えた。

「ええ。どうもありがとうね」

「さっさと済ませろよ」

「そうするわ」

「じゃあな」

「じゃ」

ぶちん。

「冗談でしょ」

あたしは、身体の底から吹き上げるものを、必死に押さえようとしていた。

しかしどうすればいい。

奴らは必死だ。そしてボスも、何となれば警察だって動かせるコネを持っている。

対抗するのは容易ではない。

「ぴきや」

ふとトリニティを見る。
こんな小さな、頼りない、くにやりとした生き物なのに。
あたしったら、何を考えているんだろう。

「ぴきやうう」
「よしよし」

あたしはトリニティに頼ずりした。
何かが芽生えた。
この子のおかげで。

それを、潰さない。潰させやしない。

「見てらっしゃい」

あたしは、覚悟を決めた。

* * * * *

古い花街の裏にある、印刷工場ばかりが集まった暗い一角。
その中に、ひときわ高いビルがある。
あたしはその通用口に、するりと入り込んだ。
古いエレベーターの扉を開け、乗り込む。

がたん。
ごおんごおんごおんごおんごおん

あたしはエレベーターの中で、メッセンジャーバッグをぎゅっと抱きしめた。

ごおんごおんごおんごおんごおん
ごととん。

がらがらと手で扉を開ける。
暗い廊下の先に、小さな明かりが漏れているのが判る。
その光の両脇には、屈強そうな男が二人。
あたしは足早に、光のほうへと歩いた。

「止まれ」

男のうちの一人があたしを見留めて、近付いて来る。

「ボスに呼ばれてるのよ」
「ああ、運び屋か」
「ええ」
「入りな」
「ありがとう」

すれ違いざま、あたしは男二人の鼻の下を、軽く触った。

「ぬ」

男達は不思議そうにあたしを見たが。
あたしはそれに構わず、するりと部屋に入り、扉を閉めた。

「遅かったな」

ボスがじろりとあたしを睨む。
その後ろには、背の高い、色素の薄い男が立っていた。

「苦勞したのよ」

「ふん。まあいい。物が確保されていればそれでいいんだ。さあ、バッグをよこせ」

「その前に」

「ん？」

「この子がこれからどうなるのか、教えてもらいましょうか」

「お前には関係のないことだ。さっさとよこせ」

「嫌よ」

「なんだあ」

「教えなさいよ。そうしたら渡してあげる」

ボスは一層凶悪な人相になった。

「お前何時から俺に指図できるようになった。運び屋の分際で余計なことに口を挟むな」

「ただの猫好きに、こんな追っ手のかかる猫を渡せる訳がないでしょう。ヤバい仕事だったんなら、それなりの情報をちょうだいよ。フェアじゃないわ」

「そうか」

かちゃり。

ボスは素早く、懐から拳銃を取り出し、私に向ける。

後ろの男は黙ったままこちらを見ている。

「ならお前は用済みだ。よこす気がなけりゃ、死んでもらうぞ」

「くっ」

「俺だって打ちたくねえ。弾が勿体ねえんだ。さっさとよこせ」

ここまで機密を保ちたいのか。

あたしは。

そうっとバッグを肩から外し、デスクの上に置いた。

そしてゆっくりと、デスクから離れる。

「ふん、手間かけさせやがって」

ボスは銃口をこちらに向けたまま、そろそろとバッグを掴む。

あたしとバッグを交互に見ながら、不器用にファスナーを開ける。

「...ん？」

ボスの顔が驚きに、続いて怒りに変わった。

「...なんだこれは」

中に入っていたのは。

ピンクの子豚のぬいぐるみだ。

「残念ね。あの子は別の場所に隠してあるのよ。あたししか知らない場所にね」

「貴様死にてえのか。おい野郎共！」

「外の間抜けな男達なら、今頃おねんねよ」

「なっ」

「強烈な麻酔薬を、長い鼻の下に塗ってやったからね」

「ぐっ、き、貴様」

「あの子が欲しいんなら、さあ、訳を話してもらいましょうか」

あたしは腕組みをして、ボスを睨んだ。

ボスは怒りに震えてあたしを睨み返していたが、

「私が話そう」

後ろに立っていた男が、初めて口を開いた。

「いいのかい」

ボスが男に訊く。

「仕方あるまい。それで納得してくれるなら、そうするしかないだろう」

「お利口さんね」

あたしは男にウィンクしてやった。男は表情を変えずに、まるで機械のように話し始めた。

「あの猫は、遺伝子操作研究の材料としては画期的だ。体細胞が比較的容易に両方の性へと転換できるという、優れた特長を持っている。更に、突然変異を起こした生物の遺伝子を安定させる酵素を持っていることが判ったのだ」

「それがどうしたっての」

「この酵素はさまざまな分野に活用出来る。奇形や発育異常の生物を、早死にさせずに育てることが出来るわけだ。何となれば、がん細胞そのものを生物として成り立たせることも可能になるのだ。生物科学や医療の分野で近年これ以上の発見はない」

「なぜ、あの大学、いえ宗教団体は、この子を血眼になって取り戻そうとするの」

「ほう、知っているなら話が早い。私の調べたところによれば、彼等は教祖のクローンを作ろうと考えているらしい。その団体の教祖というのは、皮膚が紫外線に酷く弱いという遺伝病を持っているそうだ。そういう形質までもコピーしなければ意味が無いのだそうだよ。愚かなことだ」

「で、あんたたちは、生物研究や医療に、あの子の身体を使おうと思っているわけね」

「勿論だ」

「嘘」

そうだ、嘘だ。

「何？」

男が口を歪めた。

「あんた、軍隊の人間でしょう。その姿勢、足運び、体幹のバランス。普通の人間なんかじゃない。まして医療技術者でもない。特殊部隊か何かに所属している、エリート軍人ね」

「なっ」

ボスが愕然としてあたしを見る。

「あたしの 트레이サーとしての能力を見くびってもらっちゃ困るわね、ボス。この男が軍人なら、あの子は軍事利用されるってことよね」

「...」

「生物兵器か何かでも作るんでしょう。突然変異した動物をクローン化して」

「くっ」

「凶星よね、お兄さん」

あたしは勝ち誇って、男とボスを交互に見た。

「嘘をついたんなら、この取引は無し。あの子は私が預かるわ」

「こ、この」

「あたしを殺したら、あの子の居場所は永久に判らなくなる。そして栄養失調で死んでしまうかもね」

「むううう」

色素の薄い男の顔が、かすかに紅潮する。
と。

ぴりりり、ぴりりり

男の携帯端末が音を立てた。男は私に目を向けたまま端末を開き、会話を始める。

「私だ。うん。うん...そうか、よくやった」

男の口の端が、上に引きつった。

「ああ...こちらで片付ける。急げよ」

何なの。

あたしは焦った。

男はゆっくりと端末を折りたたみ、懐に入れた。そして。

「残念だったね運び屋さん。あの猫に埋め込まれたマイクロチップから出る微弱な電波を、私の部下がキャッチしたよ」

「なっ」

迂闊だった。

「君は知りすぎたな。可哀想だが」

ボスの顔が再び凶悪になる。

「死んでもらうぜ」

「くっ」

ゆっくりと、ふたつの銃口があたしに向けられる。
動けない。

あたしは。

手を腰のあたりにぴったりとくっつけたまま。

握っていた小さな粒を、親指の爪に乗せた。

ぴん、と弾く。

粒がボスの顔めがけて、飛ぶ。

ぱんっ

「あがっ」

ボスの目の辺りで、痾癩玉が破裂した。

男が一瞬たじろいだ。

あたしはその隙に、横に倒れ込みながら、男に痾癩玉を投げつける。

ずだああん

男が発射した弾丸は、あたしの肩をかすめていった。

服が裂け、血が飛ぶ。

ばばばばばばばん。

「ぐあああ」

男の顔面で癩癩玉が弾けた。

今だ。

あたしは扉を体当たりで押し開け、非常階段へと走った。

「くっそおおお」

後ろで男の呻きが聞こえる。

非常口を開け、階段を猛スピードで飛び降りる。

流石に軍人はしぶとそうだ。あたしはすぐそこに迫っている隣のビルの非常階段に飛び移り、逆に上へと駆け上がった。

「えいっ」

錆び付いた南京錠を蹴り上げて壊し、あたしはビルの屋上へと躍り出た。

そして急いで身を陰に隠す。

そうっと覗いてみると、あの男がようやく非常階段へとやって来て、辺りをきょろきょろと見回しながら、

「奴は逃げた。追跡は私がやる。お前等はターゲットを急いで確保しろ」

と、携帯端末で指示を出し、階段を駆け下りていった。

「ふう」

あたしはひと息ついた。しかしぐずぐずしてはいられない。

此処は小さなビルがたくさん建っている。隣のビルとの距離もかなり近い。

どうせ路上は奴らがうようよしてるんだろう。ならば。

今日は空の上がいい。

「行くっ」

たんっ

あたしは跳んだ。

ビルからビルへと飛び移り、ハイスピードで屋根を駆け抜けた。

景色が目まぐるしく変わる。窓から驚いてあたしを見る人がいる。

革のグローブが熱を持ち始める。

足首が時々悲鳴を上げる。

しかし。

「止まるな」

あたしの鉄則。
スピードを、落とさないこと。

身体を弾ませて跳んでゆくたび、あたしは一匹の猫になってゆく。
闇の中で生きる、一匹の猫に。

* * * * *

「はあ、はあ、はあ」

一時間ぶりに地上に降りた私は、全速力で走っていた。
もう周りに構ってはいられない。ここからは最短距離だ。
道行く人はあたしに驚いて道をあける。あたしもステップで人々を交わす。
逃げ。逃げ逃げ逃げ。

見えた。
あたしの目的地と。
ごつい二人の男が。
今にも、入ってゆく。
扉に手を掛ける。

「させるかっ」

あたしは全速力のまま。
奴らに跳び蹴りを食らわせた。

「どわっ」
「ぐえ」

二人は数メートル吹っ飛ばされて、その場に伸びた。
通行人は啞然として私を見る。
そんなのに構ってられない。
あたしは、さっさと目的地に入った。

「い...らっしゃい...ませ」

店員が驚いてあたしを見る。無理もない。

「と、トリニティは、げ、元気？」

あたしはぜいぜいと息を吐きながら言う。

「え、ええ」

「トイレは」

「しましたよ、両方とも」

「ミルクは」

「さっき飲んだばかりです」

「そう、よかった」

ふうふう、とあたしは長く息を吐き出した。

真逆おおっぴらにペットホテルに預けるなんて、奴らも思わなかつただろう。

あたしは大事そうに抱えられてやって来たトリニティを、預けておいたバッグに、そうっと入れた。

どうやら眠っているらしい。すう、すう、と息をしている。

「ふふふ」

あんたのおかげで、こっちは大変なのよ。

そう心の中で呟いた。

「お世話さま」

そうして、店のカウンターに札束をぽん、と置いて、あたしは急いで店を出た。

「あ、あ、ありがとおございましたあああ」

素っ頓狂な店員の声に見送られて。

まだ路上で伸びている男どもを踏み越えて。

あたしは走りながら、バッグを身体にぴったりと装着した。

そうして。

路地を抜け、地下に潜り、タクシーを乗り継いで。

あたしはなんとか、奴らをまくことに成功した。

* * * * *

「これでよし、と」

あたしが辿り着いたのは、情報屋ザイの隠れ家だ。

裏の情報を取引しているこの男は、ごく限られた人間にしか、住処を明かしていないのだった。

勿論ボスも此処を知らない。

「終わったよ」

「ありがとう」

ザイは、トリニティの身体に埋め込まれていたマイクロチップの信号を解析し、電波の発信機能を止めてしまったのだ。

これで奴らは、電波を頼りに追ってくることは出来なくなる。

しかし、だ。

「もうひと工夫欲しいわねえ」

あたしは腕組みをして、言った。

「何だよもうひと工夫って」

「ん？ まあ、下らないことよ」

「下らないのかよ」

「子供がする悪戯みたいなもんかなあ」

ふふ、とあたしは含み笑いをして、すやすや眠っているトリニティを撫でた。

「そんなことはいいからさ、せっかく来たんだ。借りを返して貰わないとなあ」

ザイは妙に甘ったるい声を出して、あたしにべったりとくっついて来る。

「なあ、いいだろお」

奴の顎が、あたしの肩に乗かった。

がん。

あたしは肩で、軽く奴の顎を跳ね上げた。

「ぐえええ」

「何よ」

「ひらかんら」

「え？ なに？」

「舌嚙んだ！」

「変なことしようとするからよ」

「もう何なんだよお。期待もたせやがってよお」

「これからこの子のミルクとトイレの世話。二時間おきにしなきゃいけないの」

「一時間くらい遅れたって死にやしねえだろ」

「そういう訳にはいかない。子育ては大変なの。判った？」

「どんだけ貸しがあるとってんだ」

「金なら払うわよ」

「そういう問題じゃねえよ」

「どういう問題よ」

あたしはザイをじっと睨んだ。

ザイは。

「ああもういいよ。俺疲れたから寝る...」

「はいはい、おやすみ」

すごすごと寢室に引き揚げるザイを見送って、あたしはトリニティを見た。

まだまだ奴らの追跡は続くんだ。

頼ってばかりで申し訳ないが。

すっぱりと手切れ出来るほうがいいってもんだ。

「ねえ、あんたも判るでしょ」

あたしはトリニティにそう呟いた。

トリニティは。

ゆっくり目を開けて、

「びゃ」

と、鳴いた。

* * * * *

翌日、あたしとザイは、トリニティを連れて港の倉庫へ向かった。

此処には奴の珍品コレクションが保管してある。

「ぜったい、無傷で返してくれよな」

「ふふん、まあ全力を尽くすわよ」

「信じてるよ」

ザイは勘弁してくれ、といった表情だが。

あたしは、

「あれにするわ」

と、真っ黒に塗装されたフルカウルのバイクを指差した。

「あれ、高かったんだけどなあ」

ザイの表情はますます曇る。

これは軍用オンロードバイクだ。警察のスピード取締装置にも反応しないステルス機能を装備し

ている。

もちろんリミッターは切っている。あたしの旅には最適だ。

「だから金はちゃんと払うわよ。ほら」

あたしは、自分の口座のカードを手渡した。
暗証番号のメモも添えて。

「おいおい、丸ごとかよ」

「いいのよ。たぶんもう必要ないもん」

「そうかい」

ザイはカードをしげしげと眺め、溜息をついた。

「なあ」

「なに」

「ちゃんと連絡よこせよ」

「うん...そうね」

「そうねって何だよ」

「生きてたらね」

「おい...」

「大丈夫。あたしはしぶといからね」

「...そうだな」

ザイは笑った。

あたしも。

笑いかけて、止めた。

「頭ひっこめて」

そうザイに言って、あたしは身体を屈めた。

「何だなんだ」

「尾けられてたみたい」

「くっそ、ボスの奴やっぱり調べてやがったか」

ザイは舌打ちする。

「強行突破しかないみたいね」

「そうだな」

「あんたはどうするの」

「俺は地下通路から逃げるさ。お前も無理しないで、今日は引っ込んだほうがよくないか」

「いいえ、駄目よ。早く出ないと」

早く出ないと。

「何だい」

「ううん、何でもない」

踏ん切りがつかないだろう。

あたしは言葉を飲み込んだ。

「じゃあ、幸運を」

「ええ。幸運ならいっぱい持ってるわ」

「へ？」

あたしは、メッセージャーバッグを、ぽん、と叩いた。

「三毛猫の雄はね、幸運のお守りなのよ」

「さいですか…。妬けるねえ全く」

「じゃあね」

あたしはザイのおでこを軽くつつくと、ステルス加工したヘルメットを被った。

急いでバイクにまたがる。トリニティを入れたバッグは、マグネットでタンクの上にぴったりと吸い付いた。

きゅるるるるるん

エンジンが掛かると同時に、奴らの姿が現れた。

先発隊が二人。その向こうから車が三台。

「VIP扱いね」

あたしはバッグの中のトリニティに、そう呟いた。

「行くよ」

ぶおおおん

ぎゅるるるるるるるる

いきなりの加速で、前輪が軽く浮き上がる。

それを全身で抑えて、あたしはギアをせわしなく操作した。

倉庫から飛び出ると、奴らの車はもう目の前だ。あたしは正面から突っ込んだ。

慌てる運転手の顔が見える。銃を構える、あの色素の薄い男の姿も見える。

ビビったら負けだ。
あたしはそのまま突っ込んだ。

きききいいいいいい

激しいブレーキ音がする。
あたしは、くいくい、と小刻みに体重を移動する。

間隔一メートルもない、クランク状の車の隙間を。
あたしは難なくすり抜けた。

「へへへん」

と、いい気になるのも束の間。
また新たな集団が、あたしの目の前に現れた。
五台くらいの車でバリケードを作って、十人ほどがこちらを狙って銃を構えている。
さっきの奴らは軍隊っぽい、今度の奴らは明らかに裏社会のやさぐれ者達だ。
あの宗教団体の回し者だろう。

「次から次へと、厄介なこと」

ふと、頭に作戦がひらめいた。
あたしは奴らに見せつけるように、ぎゅるぎゅると音を立てて大きくUターンし、もと来た道を
引き返した。

「追え！」

奴らは慌てて追って来た。
そして正面からは。
さっきかわしたばかりの、三台の車が。

「二大勢力、ごたいめーん」

タイミングを計れ。
スピードを調節しろ。
ぎりぎりまで近付くんだ。

銃を構えた男が、車から身を乗り出した瞬間。
あたしは急カーブし、右の細い路地に突っ込んだ。

がこん
だだん

どすん

背後で鈍い衝突音がする。
せいぜい、奴らの間で揉めてもらうことにしよう。

「さあ急ぐわよ」

速度を上げて、埠頭に面した道路をひた走る。
ヘルメットを抜けてゆく風が心地よい。
束の間のシーサイド・ドライブだ。
もう少しで港湾地区を出られる。

と思ったら。

港の出口に、巨大なトレーラーが割り込んで来た。
あたしの行く手を阻むように。
ふと後ろを見ると。
奴らが集団で追ってくる。

「くそっ」

みるみるうちにトレーラーが近づく。
後ろの車も、物凄いスピードで追ってくる。
トレーラーの運転席から、男があたしを銃で狙っている。

そう、あたしの鉄則。
スピードを、落とさない、こと。

神よ。護り給え。

トレーラーに衝突する寸前。
あたしはバイクの後輪を滑らせた。
バイクも、あたしの身体も横倒しになる。
火花が散る。ステルス・スーツの革が焦げる。

そしてそのまま、あたしはバイクごと、トレーラーの下をくぐり抜けた。

足で思い切り地面を蹴る。
バイクが起き上がり、タイヤが接地した瞬間、あたしはスロットルを最大にした。

ぎゅるるるるるるるる

タイヤが白い煙を上げる。

必死にバイクを押さえつけると、まるでロケットのように、バイクは猛スピードで走り出した。

きiiiiiiiiiiii

きiiiiiiiiiiii

背後で甲高いブレーキ音が鳴り響き。

幾つもの激突音が、空気を震わせた。

* * * * *

東北の田舎道を、あたしはあてもなく、たらたらと走っていた。

道の脇をふと見ると、小さな神社が見える。

あそこで休憩しよう。バイクをするすると鳥居の脇につけ、あたしはヘルメットを脱いだ。

「ふう」

脇腹と肩の火傷は、幸い軽そうだ。銃弾の傷も大したことはない。

「さあ、出ておいで」

あたしはバッグを開けた。

「ぴきゃ」

トリニティが、待ってましたとばかりに顔をだす。

その顔を見て。

あたしは。

「ぷっ」

あたしは。

「ぷはははははははははは」

笑ってしまった。

世にも貴重な雄の三毛猫トリニティは。

あたしの変装のおかげで。

黒斑に、でっかい鼻くその付いた、不細工猫に生まれ変わっていた。

「あははは、あんた、かわいいよ」

あたしはトリニティを抱き上げた。

そうしてその、鼻くそをつけたような鼻面に、軽くキスをした。

「びきや...」

トリニティはたぶん。

勘弁してくれよ、って言ったのだ。

おしまい